



あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

八雲町の事例

No51

八雲町の歴史と農業概況

八雲町は、平成十七年熊石町との合併により、渡島半島のほぼ中央部を占める、日本で唯一日本海と太平洋に接している九五六平方キロメートルの広大な面積を有する町、東は内浦湾に注ぐ遊楽部川、野田生川、西は日本海に注ぐ相沼内川、見市川が流れ典型的な楡の歯状中山間地帯を構成している。八雲の歴

史は古く、明治十一年旧尾張徳川藩土の入植に端を発した道内でも最も古い開拓の歴史を有する地域の一つである。

開拓の当初は馬鈴薯の生産が主体で町内圃場の七〇％に作付された。八雲で生産される「でんぷん」が国内市場の相場を左右するまでになったが、大正初期に連作による地力の低下と価格の暴落が重なり壊滅的なダメージを受けた。

再生の手段として大正期の半

ばから酪農を選択し、以来半世紀にわたる努力の結果、今日の酪農郷が築きあげられた。駒ヶ岳の噴火による火山性土壌と「ヤマセ」や頻繁に発生する海霧の影響から作付作物は限定され、米も「もち米」が主体であつた。

現在は種芋の生産や野菜（軟白ネギ、ダイコン、カボチャ、インゲン）、花卉（カスミノウ、スターチス）の生産に力を入れている。

乳用牛飼養状況の推移

区分	H7	H12	H15	H17
飼養戸数	220	171	160	150
	100.0%	77.7%	72.7%	68.2%
飼養頭数	12,500	10,619	11,400	10,300
	100.0%	85.0%	91.2%	82.4%
出荷乳量	44,900	44,587	43,338	42,446
	100.0%	99.3%	96.5%	94.5%

資料：農林水産統計

新規就農の状況

区分	H13	H14	H15	H16	H17
Uターン	4	3	1	4	1
学卒	2	1	3	4	1
新規参入	1				

資料：渡島農業改良普及センター北部支所

町の基幹である酪農は平成十七年で一五〇戸で一〇、三〇〇頭を飼養、平均頭数は六九頭になるが、五〇〜七〇頭飼養が全体の四〇%を占め経営規模は決して大きくはない。牧草及び青刈トウモロコシの面積が多く、飼料自給率の高いことが八雲酪農経営の特徴となっている。

農家戸数の減少

農家戸数は平成十二年から十七年の五年間を見ても二八二戸から二三五戸へと四七戸減少しており、農畜産物価格の低迷と高齢化の進行を考えるなら、この傾向は今後も続くと予測される。しかし、その離農跡地を吸収して規模拡大を図ろうする農家は少なく、今後条件不利地区から始まる農地の遊休化が懸念される。

新規就農

平成十二年に新規就農促進を目的に「八雲町新規就農支援資金貸付条例」を制定し、二〇〇万円を貸し付け、五年間営農を継続するなら償還免除するなど制度を策定したが、なかなか就農希望者が現れなかった。し

かし現在、離農予定者のところで研修して後継するという形で、酪農と肉牛経営農家で二組の研修生が頑張っている。新規就農者が無理なくスムーズに就農までこぎ着けるシステムとして、実際に

今まで営農してきた農家に諸々の営農技術を教えてもらうことが、その後自分のオリジナルな経営に転換するとしても、現地の実情を吸収したり効率的に営農技術を習得するという意味でも有効と思われる。

自給飼料に立脚した収益性の高い酪農経営

当地の酪農経営は根釧・天北がフリーストール、ミルクングパーラー導入による大型化、効

率化に進む中で、極力設備投資を抑えて、健全経営を指向してきた。そのため設備は老朽化し労働条件も必ずしも良いとは言えないがその地区にあった経営、そして乳製品の加工販売に力を入れる経営も存在している。最近の輸入飼料の高騰に最も耐力のあるのは、規模は小さくと



ユーラップ岳を望む牧場風景



小栗さんご夫妻と おいしいチーズ

も良質粗飼料を基盤とした放牧型の経営ではないかと考えられる。

小栗隆さん

小栗さんは夫婦で中標津町の三友農場を見学し、彼の放牧によるゆとり酪農に心酔して平成九年から放牧主体の飼養体系に切り替えた。現在家族労働二・

五人で経産牛四五頭、育成牛十頭を年間二〇〇日放牧とローラップサイレージを組み合わせ、長年使い込んだ機械を修理して丁寧に通することで牧草のTDN 1kgあたり生産費は二九円牛乳の生産コストは五〇円/kgを実現している。しかし経営を簡素化することだけでなく自動自給機導入により生まれた「ゆとり」を利用して平成七年から手作り、無添加、無調整をポリシーに十種類の様々なチーズを

年間生産している。

自宅での販売の他、農協やレストランでの販売も行っているが、近隣に三カ所のチーズ工房があり、そこを巡って試食しながらお気に入りのチーズを選ぶような、魅力ある観光スポットになってほしいという夢を持っている。自家製のチーズを試食したが、「同じ自分の家の牛乳を使っても夏と冬では色も味も違う、どちらが美味しいと言うのではなく各々の特徴を是非味わってほしい」という小栗夫人の思いを反映した、塩分控えめで原料の本来の味を楽しめるチーズであった。

近代的な設備投資と経営規模拡大によるコスト削減だけでなく、地域の条件を反映したこうした経営がモデルとなることは、酪農にも多様な経営形態が存立できることを証明した。その結果小栗牧場は全国の中山間で応用可能な「次世代に継承できる

持続可能な酪農経営」モデルとして平成十九年度農林水産祭天皇賞を受賞した。その経営を公開することで若手経営者を育てたいと語る小栗さんは地域農業のリーダーであり後継者育成の役割を担う「北海道指導農業士」の一人でもある。

梶田とき子さん

八雲町内を山崎から野田生まで国道に平行して走る「ミルクロード」は遠く駒ヶ岳を見ながら内浦湾を巡るすばらしい景色のワインディングロードで、その一角に無人の野菜直売所とドライフラワーの看板が目印の梶田さんの工房がある。

女性の「北海道指導農業士」梶田さんは「ハーブを暮らしの中に」をテーマに仲間八人とフロムネイチャーファームというドライフラワー工房を立ち上げ

女性グループの活動

グループ名	会員数
八雲漬物研究グループ	15
八雲ハンドメイドの会	15
ユーラップハーブの会	16
東野ほっぺの会	6
八雲町野菜グループ連絡協議会	21
ファームネット八雲	6

資料：渡島農業改良普及センター北部支所



梶田さんの作品展示コーナー

自前で自然乾燥の工房と研修施設を作ってしまった。一千万円ほどの資金は町の助成やし資金そして家族の協力で調達し、「まあ、定年後の道楽と思えば、他に贅沢しなれば、死ぬまでには返せるでしょう」と屈託がない。施設は三〇人ほどが一度に研修できる研修室兼乾燥ルームと売店からなり、とても個人の施設とは思えない。

自分の作品を販売すると言うよりも、この施設を核として交流の輪が広がればよいという考えで、原材料の花はみんなの分をまとめて購入し、多くの作品は近隣農家の奥さんの委託作品である。

梶田さんと同じような活動をしている組織が多数存在しており、これらを結びあわせ、さらに小栗さんたちのチーズ工房や、町内に点在するレストランを結ぶネットワークが機能すると、一日八雲で遊ぶほうという観光客を充分呼び込める潜在力があると感じさせられた。ただし、国道が市街地を迂回していることから、人通りが少なく目的の農場を探すのに一苦労した。統一した案内板と拠点としての観光案内センターが是非ほしい。そこに内浦湾産直の海産物も合わせた土産の直売所があればより八雲観光を楽しむことができる。

三沢公雄さん

若者の考えも聞きたいと思つて、地域酪農青協の役員をして、三沢さんを取材した。ちょうど朝の搾乳の終わりかけで、集乳のタンクローリーが来たり忙しい時間帯であつたが、さわやかな夫婦が暖かく歓迎してくれた。奥さんは出産、育児で二年間休業していたが最近仕事に復帰。非農家からの嫁入りで最初は疲れてとまどつたが、今は夫と共に生き生きと乳搾りに励んでいる。三代目にあたる公雄さんは後継後、規模拡大を含め自分が考えた経営形態への転換を望んで焦つた時期もあつたが、今は子供たちの将来を見据えて、堅実に施設の更新を計画している。酪農協の活動にも熱心で地域の若者たちが協力して、活性化に繋げたいとの意欲を持つている。



搾乳作業中の三沢さん夫妻

三沢牧場の帰りユーラップ川に架かる橋の上から駒ヶ岳でも写そうと車を停めると、川の中には鮭が群れていた。川岸には産卵を終えた鮭が累々と横たわっていたが、カラスや鳶も食べ飽きたのかただ柏の樹に留まっているだけ、豊かな自然と暖かな住民にふれて是非また来てみたいと思わせる取材だった。「春の若葉の季節もいいよ！」という奥さんの声はまだ頭の片

隅に残っている。

北海道における中小規模集約酪農の進路

今回の取材の後八雲の農業に
関連した資料を探してみると平
成八年に当研究所が約一年をか
けて行った八雲町のアンケート
と現地調査の報告書「北海道に
おける中小規模集約酪農の進
路」を見つけた。その中で当時

の北海道立中央農業試験場長尾
部長や北海道大学坂下教授が①
八雲町は中小規模酪農経営が機
能の主流を占め、複合作物であ
る種子ばれいしよや個体販売が
経営を支えている、②酪農家の
意向の特徴は現状の経営スタイ
ルを維持しながら、増産もしく
は規模拡大を指向している、③
しかし酪農部門の収益性分析か
ら頭数規模や個体乳量と収益性
が相関しておらず、酪農所得を

補完するはずの種子ばれいしよ
や、個体販売を含めていくつか
の問題が収益性を阻害している。
そして改善のテーマとして

「経営効率改善のために、今後
の経営方向の見直し」を提言し
ている。経営規模拡大に「行け、
行けどんどん」の時期にこの提
案をしたことに、手前味噌なが
ら感心すると同時に、現在の厳
しい情勢を乗り切る最善の提案
だったとの確信をもった。

まとめ

今回取材した三農家に共通し
ているのは、いずれも家族労働
の範疇でゆとりを持った酪農経
営に取り組んでいること。その
ゆとりを元に様々なテーマに意
欲的に取り組んでいること。ま
たその取り組みが地域活性化の
芽となつて周辺に良い影響を与
えていること。それぞれが八雲

を愛し、地域活性化に貢献した
思い思っていることが印象に残つ
た。
土地を無償譲渡している。希望
者は気軽に役場まで相談するよ
うに薦めたい。

しかし八雲町は、大分県の湯
布院に負けない景観や温泉を含
め道内外から人を呼び込めるだ
けの要素をもちながら、個々の
活動が点からやつと

線になりつつという
段階にある。これを
面として八雲町内全
体に広げるには関係
農業者の取組みや行
政を始め、普及セン
ターの濃密な支援の
一層の強化が求めら
れていると感じた。

最後に宣伝ではな
いが、町では個人か
ら寄贈された土地を
宅地として整備して、
すぐに他の人に転売
しないなどごく緩や
かな条件で移住希望
者に平均二五〇坪の



ユーラップ川の豊かな流れ

(社)北海道地域農業研究所
特別研究員 齊藤 勝雄